Sad murderous intent

黒羽蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｓａｄ　ｍｕｒｄｅｒｏｕｓ　ｉｎｔｅｎｔ

【Ｎコード】

Ｎ２７４３Ｄ

【作者名】

黒羽蘭

【あらすじ】

１年前、まだ工藤新一での時・・・学校でおきた哀しき殺人。推理系作品です。（完結済み）

1

give me the reason why

どうして教えてよ

though I had loved him

彼を愛していたのに

though I had believed you

あなたを信じていたのに

why did you betray me?

どうして裏切ったの

we were friends, weren't us?

私たちは友達じゃなかった…?

1年前……まだ新一が高校生探偵になってまもないころ……

冬の12月……

ある日の学校にて

「おはよう新一！」

「よぉ、おはよー」

―いつもの通り――

「工藤！サッカーやろうぜ！」

「おう！今行く！」

―今日もいつも通りすごしていた――

「ねね、工藤君、ここの数学教えて～！」

「ああ、そこはだな…」

―誰も予想できるわけなかった―

「それでな蘭、ホームズはこの後な…」

「あ～もう！わかったわよこのホームズオタク！」

―この後おこる悲劇を―

ある日の夕方、新一は遅くまで学校に残っていた。
先生の手伝いをさせられていたのだ
そして調べたいことがあり、たまたま図書室へ向かった

そして図書室に入った

ところが、目にした光景は…

「な…なんだ…？！」

ー床に大量に散らばった本ー

「……？！……ったくちゃんとしまえよなー」

一瞬びっくりしたが誰かのイタズラだと思い、本を直そうし床に屈んだ時、

―その時いやな予感がしたのはなぜだろう―

―まるで胸がしめつけられるようないやな予感が―

ふと新一が顔をあげると……

「！」

足がみえた……

まさか本を取り出すのに失敗して転倒したのだろうか

慌てて本棚の向こうがわにまわる

「お、おい……大丈…

……！！！！……」

そこにあったのは

―死体―

「こっこれは……！！」

腹から大量の血が出ている女子生徒がたおれていた

その時ー

突然ガラッとドアをあけ誰かが入ってきた

「？！」

「し、新一…？！どうしたの？！」

「蘭？！な、なんでここに……蘭は見るな！」

「えっ…？なんで……
きっ　きゃあああぁぁぁぁ！！！」

とっさに蘭をおして遠ざけようとしたが見てしまった

「落ち着け！とにかく助けをよぼう！」

「う、うん……！警察と先生たちよんでくる！」

（え……？今なんで……？）

「あ、ああ、頼む！」

―なぜか蘭の言葉がひっかかった―

2

蘭が図書室を出ていった後、新一はその女子生徒の脈をとってみた。

「ないか…」

（腹の傷跡からみて刺し傷……状況的にみて自殺や事故の線はないな……となると、殺人事件……）

新一は改めて死体の顔をみた。

クラスメートだった。

ファンファンファン……

数十分後警察が到着した。

見知った刑事たちが続々とやって来た

「目暮警部！被害者の身元確認とれました！」

「おお、高木君！それで、どうだったのかね？」

「被害者は朝倉百合、１７歳、この学校の生徒で、２年Ｂ組です。」

新一は目暮警部をみつけ、駆け寄る。

「目暮警部！」

「く、工藤君？！どうしてここに…あ、君はこの学校の生徒だったのか！」

「ええ……そして現場第一発見者であり、朝倉のクラスメートでした」

「何？！そ、そうか…それは残念だったな…ワシらが必ず犯人をつかまえるからな」

「はい……よろしくお願いします……」

（おそらく犯人はこの学校の生徒だ……それもオレの身近な人かもしれない……絶対につきとめてやる）

～・～・～・～・～

新一は現場の図書室を見歩き、調べていた。

（こんなに本が荒れているということはずいぶん犯人とやりあったのか？……
ん？なんかこの本変だな…？）

床にちらばった大量の本の中で、死体の手のそばにあった英語の本が開いていて血がついていた。

（ページ数を表す数字に血がついてる……２５ページの所だ……“２５”？）

死体をよく見てみると、右手の中指でその２５をなぞったのだとわかった。

しかもよくみるとそのページが上から下に向かって真っ二つに破れかかっている。

「まさか…これは……」

そのとき蘭が後ろから顔をのぞかせた。

「新一……何かわかった？」

「蘭？！オメー大丈夫なのか？」

「うん、私は平気……ねぇ、新一は犯人は誰だと思うの？」

「まだわからない…でもおそらくオレたちの身近な人だ……」

「……」

蘭は何かものをいいたげな表情をしていた。

「ん？どした蘭？」

「あ、いや…なんでもないよ…がんばってね！」

「ああ…」

「あ、高木刑事！ちょっと・・・」

近くを高木刑事が通ったので呼びとめる。

「ん？どうしたんだい工藤君？」

新一はあの本をみせた。

「こ、これは・・・！目暮警部！こんなところに血痕が！」

「何？！２５ページ・・・？被害者が指でなぞったみたいだな・・・」

「つまり、これはダイイングメッセージですよ」

「ダイイングメッセージ！？刺された後、気力をふりしぼって“２５”を表したのか・・・だが一体、“２５”とはなんなんだ？」

「もしかしたら何かの番号じゃないでしょうか？出席番号とか・・・」

「いいえ、僕も最初そう思いましたが２－Ｂの２５番は、最近ケガをしてずっと病院に入院してるんです。もちろん今日もきてません」

「じゃあ別の意味かもしれんな・・・とりあえず他のことも考えよう。検視はどうだったんだ？」

「はい、死亡解剖の結果、死因は出血多量、死亡推定時刻は工藤君が発見したのが約１８時だったのでだいたい１６時半～１７時半だと思われます」

「そうか・・・じゃあ高木君、その時間帯にこの学校にいた人を調べてくれ！」

「はい！」

～・～・～・～・～・～

「警部！調べおわりました！」

「ごくろう。どうだったのかね？」

「やはり夕方なので生徒のほとんどは下校していました。監視カメラやガードマンに確認をとりましたが不審者はいませんでした。こ

の時間に学校にいたのは、教員・バスケ部・テニス部・そして2年生が何人かいましたが、アリバイのないのは…3人だけです…」

「その3人とは?」

「そ、それが…」

「?」

なにやら高木刑事は言いづらそうな様子だった。

「みんな2ーBで…馬場絵里奈さん、伊藤和也君、そして……毛利蘭さんです」

「……そうか……蘭君はここにおるからあとの二人をつれてきてくれ」

「ハッ!」

3

蘭が図書室を出ていった後、新一はその女子生徒の脈をとってみた。

「ないか…」

（腹の傷跡からみて刺し傷……状況的にみて自殺や事故の線はないな……となると、殺人事件……）

新一は改めて死体の顔をみた。

クラスメートだった。

ファンファンファン……

数十分後警察が到着した。

見知った刑事たちが続々とやって来た

「目暮警部！被害者の身元確認とれました！」

「おお、高木君！それで、どうだったのかね？」

「被害者は朝倉百合、１７歳、この学校の生徒で、２年Ｂ組です。」

新一は目暮警部をみつけ、駆け寄る。

「目暮警部！」

「く、工藤君？！どうしてここに…あ、君はこの学校の生徒だったのか！」

「ええ……そして現場第一発見者であり、朝倉のクラスメートでした」

「何？！そ、そうか…それは残念だったな…ワシらが必ず犯人をつかまえるからな」

「はい……よろしくお願いします……」

（おそらく犯人はこの学校の生徒だ……それもオレの身近な人かもしれない……絶対につきとめてやる）

～・～・～・～・～

新一は現場の図書室を見歩き、調べていた。

（こんなに本が荒れているということはずいぶん犯人とやりあったのか？……
ん？なんかこの本変だな…？）

床にちらばった大量の本の中で、死体の手のそばにあった英語の本が開いていて血がついていた。

（ページ数を表す数字に血がついてる……２５ページの所だ……“２５”？）

死体をよく見てみると、右手の中指でその２５をなぞったのだとわかった。

しかもよくみるとそのページが上から下に向かって真っ二つに破れかかっている。

「まさか…これは……」

そのとき蘭が後ろから顔をのぞかせた。

「新一……何かわかった？」

「蘭？！オメー大丈夫なのか？」

「うん、私は平気……ねぇ、新一は犯人は誰だと思うの？」

「まだわからない…でもおそらくオレたちの身近な人だ……」

「……」

蘭は何かものをいいたげな表情をしていた。

「ん？どした蘭？」

「あ、いや…なんでもないよ…がんばってね！」

「ああ…」

4

「あ、高木刑事！ちょっと・・・」

近くを高木刑事が通ったので呼びとめる。

「ん？どうしたんだい工藤君？」

新一はあの本をみせた。

「こ、これは・・・！目暮警部！こんなところに血痕が！」

「何？！２５ページ・・・？被害者が指でなぞったみたいだな・・・」

「つまり、これはダイイングメッセージですよ」

「ダイイングメッセージ!?刺された後、気力をふりしぼって“２５”を表したのか・・・だが一体、“２５”とはなんなんだ?」

「もしかしたら何かの番号じゃないでしょうか?出席番号とか・・・」

「いいえ、僕も最初そう思いましたが２－Ｂの２５番は、最近ケガをしてずっと病院に入院してるんです。もちろん今日もきてません」

「じゃあ別の意味かもしれんな・・・とりあえず他のことも考えよう。検視はどうだったんだ?」

「はい、死亡解剖の結果、死因は出血多量、死亡推定時刻は工藤君が発見したのが約１８時だったのでだいたい１６時半～１７時半だと思われます」

「そうか・・・じゃあ高木君、その時間帯にこの学校にいた人を調べてくれ!」

「はい!」

～・～・～・～・～・～

「警部！調べおわりました！」

「ごくろう。どうだったのかね？」

「やはり夕方なので生徒のほとんどは下校していました。監視カメラやガードマンに確認をとりましたが不審者はいませんでした。この時間に学校にいたのは、教員・バスケ部・テニス部・そして2年生が何人かいましたが、アリバイのないのは…3人だけです…」

「その3人とは？」

「そ、それが…」

「？」

なにやら高木刑事は言いづらそうな様子だった。

「みんな2－Bで…馬場絵里奈さん、伊藤和也君、そして……

毛利蘭さんです」

「……そうか……蘭君はここにおるからあとの二人をつれてきてくれ」

「ハッ！」

5

「あ、高木刑事！ちょっと・・・」

近くを高木刑事が通ったので呼びとめる。

「ん？どうしたんだい工藤君？」

新一はあの本をみせた。

「こ、これは・・・！目暮警部！こんなところに血痕が！」

「何？！２５ページ・・・？被害者が指でなぞったみたいだな・・・」

「つまり、これはダイイングメッセージですよ」

「ダイイングメッセージ！？刺された後、気力をふりしぼって“２５”を表したのか・・・だが一体、“２５”とはなんなんだ？」

「もしかしたら何かの番号じゃないでしょうか？出席番号とか・・・」

「いいえ、僕も最初そう思いましたが２－Ｂの２５番は、最近ケガをしてずっと病院に入院してるんです。もちろん今日もきてません」

「じゃあ別の意味かもしれんな・・・とりあえず他のことも考えよう。検視はどうだったんだ？」

「はい、死亡解剖の結果、死因は出血多量、死亡推定時刻は工藤君が発見したのが約１８時だったのでだいたい１６時半～１７時半だと思われます」

「そうか・・・じゃあ高木君、その時間帯にこの学校にいた人を調べてくれ！」

「はい！」

～・～・～・～・～・～

「警部！調べおわりました！」

「ごくろう。どうだったのかね？」

「やはり夕方なので生徒のほとんどは下校していました。監視カメラやガードマンに確認をとりましたが不審者はいませんでした。この時間に学校にいたのは、教員・バスケ部・テニス部・そして2年生が何人かいましたが、アリバイのないのは…3人だけです…」

「その3人とは？」

「そ、それが…」

「？」

なにやら高木刑事は言いづらそうな様子だった。

「みんな２－Ｂで…馬場絵里奈さん、伊藤和也君、そして……毛利蘭さんです」

「……そうか……蘭君はここにおるからあとの二人をつれてきてくれ」

「ハッ！」

6

みんなが図書室に集まった。

事情を知らない馬場と伊藤はイライラしながら言った。

「なんでこんなとここなきゃいけねぇんだよ？もう遅いんだから早く帰りてぇんだけど？」

「そうよ！なんで警察がきてるの？何かあったの？」

「……私たちが疑われてるの？」

蘭が不安そうに言った。

「疑われてるって・・・どうゆうことだよ？！」

「いや、実はさっき・・・朝倉百合さんが殺害されたんです」

高木刑事がこれまでの事情を話す。

「ええ?!まじかよ・・・」

「ゆ、百合が?!そ、そんな……!!」

馬場は泣き崩れた

「それで、悪いが１６時半～１７時半にどこにいたか教えてくれんかね?」

「オレは授業サボって屋上で昼寝してたよ、気づいたらもう空真っ暗だったけど」

「私は…パソコンルームにいました……レポートの作成をしてました…」

「蘭君はどこにいたんだね?」

「私は美術室で課題をしてました。その後、美術室から出てたまた

ま図書室の前を通った時、新一が入ってくのが見えて声をかけようと思って私も図書室に入りました」

「その時、工藤君が死体を発見した直後に蘭君も見たのか……」

目暮警部は学校の地図を見て、

「屋上もパソコンルームも美術室もみんな図書室の近くだな・・・あと、“２５”について何か知らないかね？」

「知らねぇよ・・・」

「わかんないです・・」

「・・・あ！そういえば・・」

今まで黙って彼らの話を聞いていた新一が気づいた

「ん？どうしたんだね工藤君？」

「朝倉ってオレみたいに暗号が好きだったからこれも暗号なのかも…」

以前、朝倉と暗号のことで喋ったことがあったのを思い出し、同時に胸が痛んだ

「なるほど。これは数字の２５としてではなく別の意味を表しているのかもしれんな」

「…絵里奈ちゃん、百合ちゃんと仲良かったよね？何か思いつかない？」

蘭が馬場にきいた。

「…んー……わかんないなぁ……」

「そっか……」

―その時、オレは蘭が何かを伝えようとしているのに気づけなかった―

7

新一はしばらく考えていたが、

「目暮警部！」

「ん？なんだね？」

「持ち物などを調べてください。犯人は返り血をあびないために何か上着を着て、手袋をはめていたはずです」

「なるほど。この部屋にないならどこかに隠してあるのかもしれんな」

「じゃあ、手わけして探してきます！」

「たのんだぞ高木君！」

～・～・～・～・～・～

『それにしても・・・なんで蘭はあの時・・・それに２５は一体どういう意味なんだ・・・？』

新一はぼんやりと近くにあった数学の本を手にとりパラパラめくってみた。

すると、あるページが目にとまった。

『ん？“数式は分けて考えよう”・・・分けて考える・・・？』

その時高木刑事がもどってきた

「警部！伊藤君のロッカーから血のついたレインコートが！」

「なに？！おい、これはどうゆうことかね？！」

「は…？そんなの知らねぇよ！！」

「じゃぁこれはどう説明するというんだ！」

「だから知らねぇって言ってんだろ！それオレのじゃねぇよ！」

『ロ、ロッカー？なんでだ・・・？それに、手袋は・・・？』

新一にとってその発見は不可解なことだった。

「くそっ、せめてダイイングメッセージの意味がわかればなぁ…」

その時、蘭が声をかけた。

「ねぇ新一、これって英語の本ってことと、ページが真っ二つに破れかかってるのって何か意味があるのかなあ？」

「！！！！……そうか……分けて考える…なるほどな！サンキュー蘭！」

「え？なんなのよ？」

「となると手袋はあの人が・・・おーし、このことを警部・・・に・・・」

「？どうしたの？」

「いや・・・蘭、馬場、ちょっと来てくれ」

「え？う、うん……」

「いいけど…？」

警察が伊藤と話している隙に新一は二人を連れて図書室をぬけだした

8

3人は、図書室から少し離れた家庭科室に来た。

「どうしたの新一？何かわかったの？」

「犯人がわかったんだ」

「まさかあたしと蘭が共犯だって言いたいわけ？」

「いや、そうじゃない」

「じゃあ解けたなら教えてよ！」

「ああ、まず今疑われてるレインコートだが、もし伊藤が犯人ならわざわざ自分の所に証拠のものを隠すわけない。また、レインコートと手袋とは別々で隠されている。おそらく手袋は自分の指紋がついてるから念入りに始末する必要があるからだろう。この家庭科室にあるゴム手袋をな……

……そうだろ？馬場……」

「！！！……な、なんであたしなのよ？！」

「あのダイイングメッセージがわかったんだよ・・・あれは２５としてではなく、２と５で分けて考えるんだ。そしてアルファベットにおきかえると、アルファベット順の２番目と５番目・・・ＢとＥだ。つまり馬場絵里奈のイニシャルを表していたのさ」

「……で、でも……もしかしたら犯人が私に罪をかぶせようとわざとしたのかもしれないじゃない！蘭にだって可能だし！だいいち、工藤君が図書室に入った後、すぐ来るなんて偶然にしたって不自然じゃない？！」

「いや……お前は気づかなかったみたいだが、おそらく蘭は…」

「！」

すると、今まで無言できいていた蘭が口をひらいた。

「うん……実は見ちゃったの…ちょうど絵里奈ちゃんたちが争ってるのを…」

「え…そ、そんな…！」

「最初はケンカかなって思ったけど突然絵里奈ちゃんがナイフを出して……それで恐くなって隠れてたの……それで、どうしようと思ってそのままずっと隠れてたら新一が入ってくのが見えて……新一に相談しようと思ってたんだけど……」

「だからあの時“救急車”でなく“警察”だけをよんだんだな？よく見ないと死んでるかどうかも殺人かどうかも分からないからな。」

新一が続けて言う。

「それに、蘭が犯人ならオレが入った後すぐに現場に入る必要はない」

「でも！その証言なら証拠にはならにいじゃない！ウソついてる可能性だってないとはいいきれないでしょ？！」

「ああ。でもお前が犯人だと証明できるものがある」

「？！」

「お前がこの家庭科室に隠したであろう手袋だよ。
予想していたよりも早く死体が発見されちまったから本当は念入りに血痕や指紋を落としてもとの場所にもどすつもりが、隠すことしかできなかったはずだ。たとえ水で洗ったとしてもルミノール反応でバレちまう。そう簡単には消えねーからな。つまり、ルミノール反応が出たゴム手袋にお前の指紋が出てくれば、これ以上の決定的な証拠はねぇぜ。」

「・・・」

馬場は黙ったままだった

「これでもちがうって言い張るか？」

「……そうよ、私が殺してやったのよ……」

馬場はあきらめたようにぽつりとつぶやいた

「絵里奈ちゃん…！どうして？百合ちゃんとあんな仲良かったのに」

「仲良かったから！！親友だったから！！なおさら辛かったのよ！！」

「？！」

「…どうしてこんなことを？」

「あたし、伊藤君と付き合ってたの…そのことは百合も知ってた。応援してくれてた。
でもちょっとしたことで伊藤君とケンカしちゃって……そしたら、伊藤君としばらく会わないうちに、百合に奪われたのよ！！
百合に問い詰めてたら

“私も伊藤君のこと好きになっちゃってーそしたら伊藤君が絵里奈と別れて付き合ってくれたのよ。もともと最初からそのつもりだったし”

って平然と言われたわ！私のことなんかおかまいなしに！
悔しくて…！親友に裏切られてショックで！
だから……初めて伊藤君に告白した図書室で……私を捨てた伊藤君に罪をかぶせて……友達だと思ってて裏切ったあの女を……

殺してやりたかったのよぉぉぉぉぉ！！！！！」

―彼女の悲痛な叫びが響きわたった……―

―その後、馬場は警察に自主し―

―残酷な悲劇は幕を閉じた―

―Ｓａｄ　ｍｕｒｄｅｒｏｕｓ　ｉｎｔｅｎｔ―

それは

―哀しき殺意―

9

警察からやっと解放された新一と蘭は、暗くなった帰り道を二人で歩いていた。

二人は会話をせず重苦しい空気の中、黙ってあるいていた。

発言をしたのは蘭だった。

「あ・・・雪・・・」

見上げると雪がちらちらと降ってきた。

「そういえば、もう12月だったなー・・・」

新一は雪を見つめながら言う。

「ごめんな、お前がずっと悩んでたのに気づいてやれなくて」
「ちがうよ、私だって目撃したこと言うべきことだったのに…なかなか言えなくて……」
「でも誰だって言えねーだろ。友達が殺害したとこを見ただなんて。気にすることねぇよ」
新一は安心させるように蘭の頭をぽふぽふ撫でた
「うん…」

蘭は新一に寂しげな表情を向けつぶやいた。

「新一は……だよね？」
「え？わりィ、今なんて言った？よく聞こえなくて、」

「ううん、なんでもない！ちょっとさっきの絵里奈ちゃんの話を聞いて不安になっちゃって……でも大丈夫だから！」

と言って蘭は走りだしてしまった。

「お、おい！なんなんだよ?！言ってからにしろよー！」

新一も蘭を追い、走りだす。

―蘭がいいかけたこと―

―でもそれは自分の心の中で打ち消した―

―その後、蘭は二度とその不安を口にすることはなかった―

新一はずっと……私のそばにいてくれるよね？

Sad murderous intent

fin.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2743d/

Sad murderous intent

2010年12月28日15時00分発行